

Special Essay

不増不減

消化器内科

神代 龍吉

小さい頃、家の近くに本屋と活版所があった。活版所は同級生の家で、遊びに行く
と輪転機の油や刷り上がった印刷物のおいがした。輪転機は轟音をたてて回るので
少し恐かった。その向こうのには壁一面にぎっしりと活字がならんでいた。原稿を
見ながら同級生のお父さんがひと文字、ひと文字、活字を拾い、葉書大の木箱に並べ
ていく。一字ずつ拾われ、箱に並べられ、ページができ、本となって本屋に並ぶ。
ひどく時間のかかる作業であるが、書物の出来上がるまでの過程をつぶさに知ること
ができた。

医学部に入り、学術書に出会うことになるのだが、「製本された医学書は
10年前の知識で書かれているから、なるべく新しいものを読むこと」と先輩
諸氏に言われた。そうかも知れない。そんなこともあって古い本を手取ることは
あまりしなくなっていた。

しかし図書館の奥には夥しい数の古い本や雑誌が納められている。奥の書架に
は行って探し物をするうちに、目的とは違う昔の記事や論文に目が行き、
それを面白がって読みふけることもたまにある。これら古い蔵書のもつ意味について
考えさせられる。国会図書館には国内で出版されたあらゆる本が蔵書
されていると聞く。そんなスペースなんてどこにあるんだろうと思う。古い
書物を保存することの意味はなんだろうか？ 資料的な価値、学問・研究の推移を
知る証拠としての意義があるかも知れない。人知の獲得の歴史がそこには
ある。また蔵書の中に記載された事柄に対して後世の研究者が新たな解釈を
加え、それで真理に一層迫ることができるかも知れない。その意味では症例
報告は貴重である。

それにしても自分の机や本棚には捨てきれない本や資料で一杯だ。見渡せば実に
夥しい蔵書ぶりである。「超整理法」も役立たなかった。蔵書にある情報をすべて頭
の中に叩き込んだらスペースは不要となるであろう。般若心経には
一切の法は空であり、空なるものには増減はない(不増不減)と説かれている。これ
は真理が許容・内包する空間は無限なのだ、と自分流の解釈をしているが、凡人には
空の体現は容易ではない。新しい知識をひとつ入れる度に、古い知識をひとつ忘れて
「一増一減」。これは私の凡人流「不増不減」で、頭の中の蔵書スペースは気にしな
くてよい。ただし、どれを忘れてよいか、それが問題だ。往々にして忘れては困る
ことを平気で忘れていく。それもまた凡人であることの証しであろう。